

鹿 児 島 茶 の 経 営 的 性 格

大 石 康 治

鹿 児 島 県 農 業 試 験 場

OISI, K. Character of the Tea-planting from the Standpoint
of Farm Management in Kagoshima Prefecture

(1)

本県は茶の適地であつて県下一円に大なり小なり栽培されているが、これらはそれぞれ立地を異にすることによつて経営に特徴をみせている。

この調査は古くからの緑茶産地である日置郡伊集院町、川辺郡知覧町及び紅茶の新興地枕崎市において行われたものである。

県平均の畑に対する茶園率は4.2%であるが知覧町

は7.7%、伊集院町9.4%、枕崎市6%で何れも高くなつている。茶園の内容はどうかと言えば知覧、伊集院では本茶園と畦畔茶園ほど半々で品種は在来種が大部分を占め、且つこれらは相当永い栽植年数を経てきたものが多い。一方枕崎は本茶園が9割近く品種は紅茶種が半分以上である。それらに在来種の中には20年～50年、極端に永いものは70～100年のものまであり、園は畦巾5～6尺が多く極く稀に7～9尺の園が後に述べる伊集院町にみられる。

第 1 表 茶 園 形 式 及 び 品 種 別 面 積 () 内 は そ の 割 合 の 百 分 率

調 査 地	茶 園 形 式		計	品 種 別 面 積		
	本 茶 園	畦 畔 茶 園		緑 茶	紅 茶	在 来
枕 崎 市	87.78 (86.7)	13.50 (13.3)	102.28 (100)	1.0 (1)	67.68 (66.8)	32.60 (32.2)
知 覧 町	102.00 (50.5)	100.00 (49.5)	202.00 (100)	4.0 (2.0)	12.60 (6.2)	185.40 (91.8)
伊 集 院 町	27.50 (53.9)	23.50 (46.1)	51.00 (100)	—	3.45 (5.8)	47.55 (94.2)

戦時中から終戦直後茶園は荒廃したものが多かつたがその後かなり増植されている。この増植の分は枕崎では大部分が紅茶種で園仕立てになつており、知覧では紅茶種が若干南部方面に入つた他は多くが在来種である。伊集院は紅茶が少く殆ど在来種が増植されると言つてよい。そして増植分は伊集院、知覧共に防災を狙つた畦畔と園仕立ての2通りである。

(2)

調査農家の茶園面積には最高11.7反から最低2畝までであつて、そのうち大面積(2～11反)栽培しているものはほとんど製茶を行う農家である。尤も製茶を行わない農家の中にも2～3反のものもある。このように茶園に多くの耕地をさくことは土地利用の一面化をもたらずと思われ。けれども反面茶園を除いた耕地の利用率は200～250%まであり、茶を小面積栽培

する農家の利用率より高くなつている。

茶園の間作についてみると幼樹園は殆ど間作している。ところが成園になるとおもむきを異にする。戦争中から終戦直後は普通作の間作も若干行われたが茶園の大面積栽培を行っている所では最近ルービン、青刈大豆等を間作している。

このように緑肥を作らない所には牧草として麦わら菜種からあるいは「かや」を刈つてきて施している。

これに対して先の製茶農家程の大面積栽培を行わない生業生産の農家は2つのタイプに分れている。その1つは間作を目的として畦巾を広く(7～8尺)とつているもの、他は(5～6尺)のものである。前者は伊集院町飯牟礼部落に多く間作に深ねぎ葉菜類等の蔬菜をとり入れ、高度の土地利用をはかると共に茶の保護により蔬菜の生産を高めるよう努めている。後者は枕崎市近郊の例で消費地を控え蔬菜を有利に販売し得

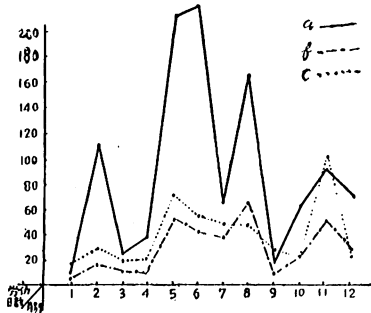
るため茶の生育を犠牲にしてまで間作しようとしている。一方同じ間作するにしても普通作あるいは(自家用) 蔬菜を、間作によつて補わなければならない程零細で、茶に全力を注ぎ得ず、且つ茶園の拡大が困難な農家もある。

(3)

茶の摘採、加工は農繁期にあたる5月上旬から8月下旬にわたつて3回ないし4回行われる。その間にも中耕、除草、施肥等の作業を行わなければならない。

従つて茶園の面積が大きければ大きい程農繁期のピークが高まることは言うまでもない

月別労働配分図



備 考

- a. 製茶を行うもの、田 3.1 反刈 27.4 反茶 10.5 反
- b. 生葉販賣のもの、田 0.5 反刈 10.8 反茶 1.3 反
- c. 茶、そさいのもの、田 1.3 反刈 17.6 反茶 0.9 反

(イ) 月別労働配分図の a は全 農業 労働時間中の 53% を茶に費し、5 月～8 月のピークが甚だしく、しかも茶の作業日数の約 8 割はこの間に集中している。そのため到底自家労力で消化しきれず雇傭に依存せねばならない。摘採は欠づみにより能率の向上に努めているが、他方施肥、防除等については周到な注意を払い施用量回数ともに多い。

(ロ) b は他の二者よりも経営規模小さく茶の作業日数は全体の 17% に止まる。従つて茶のために農繁期

の労働が過重になつたとも考えられない。これは経営の他の作目と茶との労働の競合を欠つみによる茶つみの能率化、それも自家労力で賄いきれないものはゆい等により解決しようとする。又これには加工が伴わないので a に較べると無理を生じない。

(ハ) c は枕崎近郊及び伊集院に見受けられ茶に特別に労力を集中するとは考えられない。茶園に蔬菜を間作すること(その際行われる整地中耕除草収穫等の作業)によつて茶の管理作業の手が省かれる。のみならず蔬菜に有機質肥料が多く施されるため、土壤の狀態を良好にする。このようにそさいの諸作業のいわば代替は茶の労働の軽減に貢献するのである。

(4)

製茶を行う農家は別表でみるとおり収量収益ともに高く、加工過程の加つていることからして集約度の高いことは明らかである。そして加工設備には莫大な資本を要し、しかも年間限られた期間しか操業出来ないに拘らず、収益はその負担を補つて余りある。同時に前述のように土地、労力ともに茶に集中して、本県茶業では最も企業的なタイプである。これに続くものが前項(イ)に述べた型で生産量、収益ともに高く茶は経営のモチーフとも言い得る。彼等は茶園の拡大、ひいては加工設備の採用まで企図するものもあるが、仕立て育成に要した費用を回収し終るまで長期間を要し相当な資本と資産力を必要とする。であるからこういった農家には共同加工場の設置が望ましいと思われる。

以上の二者より少ないものは所謂茶 蔬菜の型であつて、これは茶の収益が少いといつても自家労賃を回収してなお余剰をみせているのである。むしろこれは防災茶園の意味から言つても、有機的全体の一肢体として経営にとり入れているところに意義がある。こういったものゝほかに 1 畝から 5 畝足らずの茶園で自給した残りを販賣し、いわば小遣金の足しにする程度の農

第 2 表 反当生葉生産量及び収益

農家	反当生葉生産量	労働賃		肥料農糞	消却費	加工費	計	粗収益	差引収益
		自家	雇傭						
a	365	4910	7709	10213	2235	21128	46195	76571	30376
b	420	7940	—	2552	1034	—	11526	39000	27474
c	320	3360	4745	5943	1373	—	15421	22300	6879

(註) 鹿児島縣平均反当生葉生産量 112 反

家も本県にはかなり多い。

第2表の農家 a b c は労働配分図中の農家と同じ。

(5)

以上のように茶は収益の高い作物でありそれを栽培する農家も企業的なものから自給的なものまで種々ある。製茶を行う農家のように集約的な経営が必ずしも合理的と断定し得ないけれども“相等しい自然的交通的事情の下で時の進歩と歩調を共にする農家は時の進歩を極く徐々にしか追わない農家よりも独りより合理的に経営するばかりでなく、同時にまた集約的にも経営するのを常態とする。このことは観察領域が狭ければ狭い程妥当する。”とブリンクマンの教えるようにその経営にはかなりの合理性が存在するのではあるまいか。又普通作あるいは蔬菜の防風、防災を慮つて茶をとり入れる経営もやはり合理的であろう。

以上述べた町村ないし部落の例でわかるようにそれぞれ段階があるけれども、大局的にみれば第3表で示すように、全国的銘茶産地である静岡、京都、奈良では何れも本茶園が大部分を占めているのに較べて本県

では畦畔茶園の方が多い、すなわち本県のような自然条件の下では、災害を回避する意味から言つても畦畔あるいは間作茶園のような形式が好まれたのである。従つてこのような防災を狙つたタイプの茶園を助長することが望ましいし、そのために栽培法あるいは技術的研究の面も考えられねばなるまい。又小規模な茶園経営農家の集合による共同加工場の設置により、個々の農家の収益を高めることも必要であろう。

この研究報告は鹿児島県農業試験場経営部長肥後技師の御教示に俟つ所多く又知覧分場足立分場長に御援助をおおいだものであることを感謝する次第である。

第3表 主要な茶産地の茶園形式

(第27次農林省統計表)

縣名	本茶園		散在畦畔茶園		計	
	町	%	町	%	町	%
静岡	12013	(92.2)	1010	(7.8)	13023	(100)
京都	674	(83.8)	130	(16.2)	804	(100)
奈良	525	(92.8)	41	(7.2)	566	(100)
鹿児島	765	(44.2)	965	(55.8)	1730	(100)